

J.アップルトン『風景の経験』を読む

「眺望-隠れ場 理論」の問題と可能性の検討についての試論

齋藤 潮¹

¹正会員 東京工業大学大学院社会理工学研究科
(〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1, E-mail:usaito@soc.titech.ac.jp)

イギリスの地理学者 Appleton の著書 *The Experience of Landscape* によって知られる「眺望-隠れ場理論」を、同書と訳書を照合して再検討することを通じ、オギュスタン・ベルク氏の「眺望-隠れ場理論」批判の意味、眺望と隠れ場が同時に成り立っている状況の象徴性ではなく、眺望と隠れ場のそれぞれの象徴性を別個に数え上げることに Appleton が傾斜したことの問題と可能性などを素描する。

キーワード: J.アップルトン, 風景の経験, 眺望-隠れ場理論, イギリス風景式庭園, ピクチャレスク

1. はじめに

イギリスの地理学者 Appleton の著書 *The Experience of Landscape* と、その「眺望-隠れ場理論」は樋口忠彦氏によってわが国の景観学界に紹介された。その「公式」の最初のもは、筆者の知るところでは『日本の景観』(1981, 春秋社)である。周知のように、同書は、氏の博士論文をもとにした著書『景観の構造』(1975, 技報堂)のII編「ランドスケープの空間的構造」が一般向けに編集、出版されたものである。

氏は、おそらく『景観の構造』出版前後に *The Experience of Landscape* (1975 初版)に出逢ったのであろう。Appleton のことは「ランドスケープの空間的構造」にいったい言及がない。しかし、『日本の景観』では、自身の考察と通じるところが多いとして、たびたび言及がある。たとえば、「アップルトン氏の考え方で興味深いのは、環境の景観を、「隠れ場所」と「眺望」と「危険」とを表現する三つの象徴の組合せととらえ、棲息適地の景観は、「隠れ場所」の象徴と「眺望」の象徴とが備わった所であるとしたことである」¹⁾といった具合である。樋口氏は「”縁”と”森の辺”」(『日本の美学』Vol.1, No.2, 1984)の中でも「眺望-隠れ場理論」を引用するなど、Appleton の考え方に強い関心を示している。

ただし、一連の著作の中で、氏による引用は一貫して「眺望-隠れ場理論」の基本的骨格までであり、「理論」の導出過程や「理論」の枠組に潜む問題点などに対する検討は省かれている。Appleton の「理論」に対する樋口氏の「好意的な」スタンスが、ある意味ではそのまま、わが国の景観学界に伝播されることに繋がったと言っ

ている。

さて、このようにして「受容」された「眺望-隠れ場理論」の本質を、今、Appleton の著書 *The Experience of Landscape* に戻って洗いなおす必要があると筆者は考える。それは、「眺望-隠れ場理論」に関連して、主として次のような疑問を抱くに至ったからである。

- i) オギュスタン・ベルク氏の「眺望-隠れ場理論」批判の意味は何か(小稿第2~3章)。
- ii) Appleton は、「眺望-隠れ場理論」を説明するために同書で引用した絵画の中に、何故、眺望と隠れ場が同時に成り立っている状況の象徴性ではなく、眺望と隠れ場のそれぞれの象徴性を別個に数え上げているのか(小稿第4~5章)。

- iii) Appleton は「眺望-隠れ場理論」を都市空間に適用することにためらいを見せていない。しかし、該当箇所について、(筆者個人として)つねに違和感を禁じ得ない。

小稿は、「眺望-隠れ場理論」の問題点と可能性について考察することを目的とする。その際、原書 *The Experience of Landscape* と菅野弘久氏による訳書『風景の経験 景観の美について』(法政大学出版局 2005)とを、必要に応じて照合しながら読み直し、i)~iii)のうちi), ii)の解を得ることを試みる(紙数の制約からiii)については機会を改めて論じる)。原書と訳書とを照合するのは、訳書では意味が把握しづらい箇所が多々あるためである。

なお、小稿とりまとめ時点で、*The Experience of Landscape* の初版本が入手できず、やむなく1996年改訂版を対象としなければならなかった。樋口、ベルク両氏が眼を通したのは初版本であることを考えると、これ

は手続き論として問題を残す。したがって、小稿は今後、初版本を入手し、考慮すべき点が明確になるまでの暫定的な論考と位置づけておく。

以下、『風景の経験 景観の美について』(2005)は『風景の経験』と略称し、ここから文章などを引用する場合は、該当頁を(p. 〇〇), *The Experience of Landscape*(1996)については、斜体太字(p. 〇〇)で表記し、必要があれば(p. 〇〇/p. 〇〇)として同時に表記することにする。

2. 「眺望-隠れ場」理論の着想とベルクの批判

(1) イギリス人文地理学界の状況

邦題『風景の経験』の訳者菅野氏は「訳者あとがき」の中で、同書(pp. 13-14)の Appleton の記述を例にひき、地理学者としての彼の問題意識は、1960年代頃から浮上して来た地理学研究界における変化、「学問的方法論が精緻になればなるほど、研究対象よりも方法論の精度への関心が高まり、結果的に対象そのものから遠ざかるという矛盾」(p. 378)にあったと述べる。これは、あたかも、イギリス出身の地理学者エドワード・レルフの『場所の現象学』(原題: *Place and Placelessness*, 1976) 執筆の問題意識をも想起させ、当時の英国の人文地理学界の状況を想像させる。

菅野氏は、「『風景の経験』は、アップルトンが自然との交感のなかで得た原体験、あるいは目に直接映るものを手がかりに、人間を自然から切り離された存在ではなく、自然を構成する重要な一部としてとらえようとする想いによって、ある統一した理論の構築という想い」(p. 378)の所産だとする。

(2) デューイとローレンツ

菅野氏の解説、あるいは Appleton 本人の『風景の経験』における言説をもとにすれば、Appleton は、アメリカの哲学者 J. デューイ (John Dewey, 1859-1952) の論考に励まされるように動物行動学分野に足を踏み入れたとみられる。「経験の本質は生命の本質的狀態によって決定される。人間は鳥や動物とは異なる一方で、それらと生命機能を共有し、生存過程を続けようとするれば、同じ基礎的な調整をしなければならない」を、Appleton はデューイの『経験としての芸術』(原題 *Art as Experience* 1934)の重要な一節として引用しているのである(p. 65)。

こうして、Appleton は、ウィーン出身の動物行動学者 K. ローレンツ (Konrad Z. Lorenz 1903-1989) のエッセイ集『ソロモンの指輪』(英訳版: *King Solomon's Ring* 1952. Appleton が参照したのは1964年版)の一節に出逢う。

・・・ *we reconnoitre, seeking, before we leave our cover, to*

gain from it the advantage which it can offer alike to hunter and hunted - namely to see without being seen.

散策途中、茂みから見晴らしのいい草地に出ようとする直前に立ち止まり、野生動物がそうするように、茂みの中から注意深く草地の様子をうかがう-「自分の姿を見せずに相手を見る」という行為を実践することで、草地にノウサギを発見し、思うさまその行動を観察するに至るというローレンツ達の逸話である。

(3) 仮説としての理論

『風景の景観』「第3章 行動と環境」の第1節「動物行動学によるアプローチ」では、Appleton は、まずエピグラフ(p. 77/p. 52)を上述のローレンツの一節とする。次いでデューイを引き、さらに動物行動学者の知見を紹介しながら、第4節「眺望-隠れ場理論」の冒頭であらためてローレンツに言及する。そして、「見ることと隠れることには・・・「原初的」活動すべてで果される独特な相補的役割がある」とし、「自分の姿を隠したまま相手を見ることができるといふ「条件が整うところでは、それを認識することに喜びがとれない、(危険に対する)不安は脇に押しやられて緊張から解放される」(p. 96. ()内は引用者=筆者)とする。

その上で、「観察者が見ることを妨げられない場合、その状況を眺望と呼び、観察者が隠れることができる場合には隠れ場と呼ぶ」とし、「姿を見せずに相手を見るという欲望を、すべての生物学的欲求を満たす」全部とは言わないが、この欲望は一定の限定の中で美的基礎となりうるとして、この美学的仮説に「眺望-隠れ場理論」の名称を与える」(p. 98 傍点訳者)と宣言する。

“To this more limited aesthetic hypothesis we can apply the name *prospect-refuge theory*” (p. 66)

次いで、Appleton は、この見地から環境がどのように評価されるかについて述べる。「生息地理論の前提には、風景の美的満足は観察者が生物学的要求を満たす上で有利な環境を経験して得られる、ということがある。眺望-隠れ場理論の場合、姿を見せずに相手を見る能力は、こうした(生物学的)欲求を多く満たすための中間段階なので、環境によってこの能力が得られるかどうか、美的満足より直接的な源泉になる」(p. 98. 傍点訳者. ()内:引用者=筆者加筆)と説く。

この最後の文章で、「眺望-隠れ場理論の場合・・・」以降は Appleton が *this* を斜体字として強調した次の原文に対応する。

“Prospect-Refuge theory postulates that, because the ability to see without being seen is an intermediate step in the satisfaction of many of those needs, the capacity of an environment to ensure the achievement of *this* becomes a

more immediate source of aesthetic satisfaction.” (p. 66)

筆者のみるところ、訳者が“the ability”を「能力」と訳し、“this”を“the ability”にとらえたことで、Appletonの言わんすることが理解困難になっている。“the ability”を「可能であること」、「this」を、“to see without being seen”に対応させれば、次のように理解できる。

眺望-隠れ場理論は以下のことを仮定に置く。すなわち、見られずに見るということが可能であることが、それら(生物学的)欲求の多くの満足に介在するのであるから、この(見られずに見るといふことの)達成を確実にする環境の容量こそが、美的満足のより直接的な源泉になる。

ここのところは、冒頭に紹介した樋口氏の解釈と微妙に異なることに注意する必要がある。重要なので再掲する。「アップルトン氏の考え方で興味深いのは、……棲息適地の景観は、「隠れ場所」の象徴と「眺望」の象徴とが備わった所であるとしたことである」(傍点引用者=筆者)。

樋口氏の言い方では、「見られず」にあることと「見る」という行為とは主体にとって同時的であるというニュアンスは弱められている。しかし、これは、後述(小稿第4章)するようにAppleton自身の姿勢を反映しているものとみられるのである。

(4) オギュスタン・ベルクによる批判

フランスの文化地理学者オギュスタン・ベルク氏は『日本の風景・西欧の景観』(篠田勝英訳、講談社現代新書1990)を発表した。同書の趣旨は、風景は文化現象としてあらわれ、風景表現は文化によって異なるが、それにしても、その基底には、「人間とその環境との間に必然的に存在する視覚的な関係」(p. 16)が想定されるというものである。この基底をベルク氏は「元風景」と呼んでいる。氏は、「元風景」を、それ自体として純粋に顕現することはなく、顕現した時点でそれはすでに文化的色彩を帯びた風景表現になっていると考えている。このように、文化としての風景、表象としての風景という観点から風景論を展開しようと試みる氏にも、より普遍的な風景概念を基底に据えたいという衝動があった。このような概念を前提としなければ、人びとが異文化の風景表現にも共感しようという事実が説明困難になるからだと推測される。

その意味で、「動物行動学的な次元に」遡れば、文化以前の、「風景の原型」に至るといふ着眼はおおいに氏の関心を引いたであろう。それにもかかわらず、氏はAppletonに脱帽していない。もちろん、Appletonの理論を文言上は真っ向から否定してはいない。が、迂遠な言い回しをもって同調を拒絶しているのである。拒絶の

理由は、「動物行動学的な次元」が文化的に多彩な表現を獲得していく過程をAppletonが跡づけていない、というものである。あえて「動物行動学的な次元」のような検証困難な問題に帰着させなくとも、風景の表象を通じて人間にとっての風景の普遍的次元に、氏はアプローチ可能だとするのである。

あるいは、あらゆる風景芸術の起源を野生動物の生存確率の問題に集約させかねないこの大雑把なイギリス人に、文化的に先進的な地位を保ち続けてきた誇り高きフランス人は賛同しかねる、という意思表示とみることもできる。

しかし、筆者にとっては、以上のいっさいはあくまでも表面的な(形式的な)問題のように思われる。次章で考察するが、Appletonは「眺望-隠れ場」理論をもとに、フランス整形式庭園の覇者A. ル・ノートル(André le Nôtre 1612-1700)の仕事を抑えめながら嘲笑し、イギリス式風景式庭園の優位をほのめかしている。ここに、「眺望-隠れ場」理論の構想の隠れたねらい(あるいはAppletonの本音)がある、というのが小稿の仮説である。

3. 庭園芸術論に立脚したバイアス

(1) 18世紀初頭の整形式庭園批判

庭園芸術論をめぐるのは、とりわけイギリス人の整形式庭園への批判は根強い。ある種の知識人達は、イギリスの有産階級がフランス由来の整形式庭園造営に心血を注ぐことを快く思っていなかったことが知られている。

ライプニッツと同世代で、哲学者であり政治家でもあった第3代シャフツベリ伯(Shaftesbury 1671-1713)は、著書『モラリスト』(1709)で、自然の生来の秩序は「王侯貴族の庭園が示すばかばかしい整形性よりも、ずっと壮麗にみえる」と述べ、整形式庭園造営に腐心するイギリス貴族達を批判した²⁾。

エッセイストで政治家でもあったJ. アディソン(Joseph Addison 1672-1719)は、自らが創刊した評論・随筆新聞『スペクテイター』紙上で、野生の自然がいかにも人間の想像力を刺戟するかを説き、当時、英国で流行していた「わがイングランドの庭園」(当時主流であった整形式庭園)などは、大規模な自家フランスの庭園、また、随所に「人為的野生」が表現されているイタリアのそれに及ばないとし、「わがイギリスの造園家たちは、自然の機嫌をとって喜ばせる代わりに、できる限り自然から逸脱(deviate)することを好む。われわれの木々は、円錐、球形、ピラミッド型に刈り上げられる。どの樹木にも灌木にも鋏のあとが見える……私自身は、木が幾何学的な形(Mathematical Figure)に刈り込まれているのより、その

大枝小枝を豊かに広げているのを見たい」³⁾として、整形形式庭園からの決別を促している。

詩人 A. ポープ(Alexander Pope 1688-1744)は、『ガーディアン』誌に「庭園論」(1713)を寄稿し、「飾らない自然の好ましい簡素さ the amiable Simplicity of unadorned Nature」を説き⁴⁾、自身も理想の庭園づくりに心血を注ぐいっぽう、書簡詩(1731)の中で、四方を壁で囲った整形形式庭園造営に大金を浪費している大地主を揶揄した⁵⁾。

18世紀初頭のイギリス人による代表的な整形庭園批判は如上の具合である。

いっぽう、造園界では、バッキンガムシャーの風景式庭園「ストウ庭園」が、ル・ノートルのヴェルサイユ宮殿庭園の整形形式に対抗しようと目された。テンプル家の所有になるこの庭は当初整形形式庭園だったが、18c初頭の当主、コバム(Cobham)子爵リチャード・テンプルが庭園改造に意欲を見せた。改造には造園家 C.ブリッジマン(Charles Bridgeman 1690-1738. 『風景の経験』では言及なし)、W. ケント(William Kent 1685-1748. 『風景の経験』では1684-)、L. "ケイパビリティ" ブラウン(Lancelot 'Capability' Brown 1716-1783. 『風景の経験』では1715-)がほぼリレー形式であたり、1730年代に一応の完成をみた(Appletonが、ケント、ブラウンに言及しながらストウ庭園に言及していないのが、ある意味では興味深い)。この庭園を先のポープは「土地の特徴を活かした望ましい自然な庭園の例として」挙げた⁶⁾。

(2) Appleton の風景式庭園擁護

さて、Appleton が以上に類するイギリス風景式庭園擁護論の影響下にあることは、『風景の経験』の次のような箇所から判明する。

「第2章 探求」で、Appleton は十八世紀の英国の造園家、W. ケント、L. ブラウン、ハンフリー・レプトン(Humphry Repton 1752-1818)を紹介し、「ケントが仕事を始めたときにも、アンドレ・ル・ノートル(1612-1700) - ヴェルサイユ宮殿を設計し、ヨーロッパの風景趣味を方向づけた - に影響された流行が、まだすっかり残っていた」と述べる。その流行とは、「規則的な幾何学形式が小規模な庭園のみならず、広々とした公園も支配した。噴水は円形や長方形の縁で囲まれ、道は一つの焦点上に他の歩道と結ばれた。ヴィスタは秩序ある規則性という印象を与える工夫が施され」というものだった。しかし、「ケントはこのような点すべてに修正を加え、より柔軟性のある方法論に換えていった。道路、歩道、装飾用水域の形は曲線と不規則なものになり、樹木と空地がまとめられて、以前であれば目立たなくされた風景の自然な線が強調された。これは人工と自然が互いに最大限譲歩することで得られる調和であり、その結果は、樹木

(とくに落葉樹、草、水という英国の気候に適する顕著な三つの要素が調和して融合することに現れた。これらに橋、門口、寺院などの小さな構造物や、もちろん大きな屋敷が据えられることもあった」(以上、pp. 45-46. 傍点引用者=筆者)。

ここで傍点を付した箇所は、Appleton が庭園において整形形式よりも風景式を優位にみていると判断される文言である。「支配」という用語と、「柔軟性」「調和」という用語のいずれに読者が親和性を抱くか、しかも、それらが「修正」という言い方で対比させられていることを考えれば、その判断の妥当性はおおよそ肯定されよう。

さらに、「第8章 流行、趣味、イデオロム」では、Appleton は、ル・ノートルの眺望は大規模だが単純で、それに比べればブラウンの創造した眺望は変化と含蓄に富むという趣旨を次に示すように明言している。もちろん、その前後にできるだけ公平な評価言葉を纏わせてはいるが。

「ブラウンは、眺望のイメージアリーで水平線を異なるように使った。ヴェルサイユ宮殿のポプラ並木にわずかに覗く水平線はヨーロッパで最も印象的なものの一つだが、実際には巨大な景観設計の或る箇所に唯一「開かれた」水平線である。・・・対照的にブラウンは、視線を水平線に向かわせるだけでなく水平線に沿って導き、「開かれた」表面と樹木に覆われた表面の間にある変化を取り込む・・・要するにブラウンは、ヴィスタにすべての希望をかけたル・ノートルより、眺望のイメージアリーをさらに大きく広げようとした」(傍点引用者=筆者、p. 287)。傍点部分は原書に戻ると、次のようである。

“le Nôtre, who put most of his eggs in the visual basket.” (p. 197)

これは、「一事業に全財産を投じる」という意味の慣用語、put all one's eggs in one basket の振りと考えられるが、フランス人でなくとも皮肉にしか聞えまい。

『風景の経験』の後半、「眺望-隠れ場」理論を援用しつつ展開している最中に、この皮肉を開陳しているのであるが、Appleton はそれ以前にある意味で周到な準備をしている。

まず、「第2章 探求」で17世紀庭園史を概観する中で、イギリス風景式庭園と対照的なヴェルサイユの代表的ヴィスタの写真を掲載してみせる(図-1)(同書「図5」, p. 46/p. 31)。次に、「第3章 行動と環境」で「眺望-隠れ場理論」のあらましと導出の経緯を述べた後、「第4章 象徴性の枠組み」において、実に奇妙な(見方によっては巧妙な)図を創作し、掲載している。

それは、「教訓的風景(Didactic Landscape)」と題する「図9」(p. 117/p. 78)で、左に人工的で直線的のヴィスタが、右に自然地形と植生が優勢な景観が、隣り合わせに



図-1 Appleton の撮影によるヴェルサイユ宮殿庭園の代表的ヴィスタ(*The Experience of Landscape* 1997 版 より fig.5 を転載)

切れ目なく描かれた不自然な風景画である(後掲, 小稿第4章 図-4)。この左半分が整形式庭園を, 右半分がピクチャレスクを意識していることは疑う余地がない。左半分は, 「第2章」に掲載されたヴェルサイユの写真を十分に想起させる。「図9」のキャプションには「本書で議論される象徴性を説明するために意図して描かれた」とある。しかし, 眺望もしくは隠れ場の象徴の多様性をまづもって示すことがこの章の目的であるなら, そもそも, ここで意図的に違いを強調した風景を無理に繋げて, 読者に左右の比較を促す必要はないはずである。

しかも, 著者は, この図を概念的(Conceptual)といわず, 「教訓的」(Didactic)と名付けている。後述するが, これは, ピクチャレスク信奉者 R. ペイン・ナイト(Richard Payne Knight 1751-1824)の教訓詩(didactic poem)の振りであり, 優れているのは左か右かをこれによって教え諭そうとする意図を含意していると考えざるを得ない。もちろん, この図の掲載章では優劣についての言及は抑制されている。ただ, 後述(小稿第4章)のように「図9」の凡例を分析すると, 左半分は「眺望のイメジャリー」を象徴する要素のみで構成されている一方, 右半分にはより複雑な「眺望のイメジャリー」に加え, 「隠れ場のイメジャリー」を象徴する要素が盛り込まれていることが明らかとなる。「図9」の掲載節が「眺望のイメジャリーと象徴性」であり, その限りにおいて「隠れ場」を論じる場ではないはずにもかかわらず, である。

(3) 風景式庭園とピクチャレスク信奉者の対立

イギリス国教会の牧師, かつ教師で旅行好きだった W. ギルピン(William Gilpin 1724-1804)は, 1770年のウェールズ地方への旅行の記録を『ワイ川紀行』(1782)として刊行した。これが大変な人気を博し, ギルピンに倣って旅行する人びとが増大したという。いわゆるピクチャレスク・ツーリズムである。ピクチャレスクという用語の

普及は, ギルピンがこの用語をもとに, それに合致する風景を求めて旅行したことにもとづくという⁷⁾。

『ワイ川紀行』を分析した大河内によれば, ピクチャレスクの根底には, 「絵画という基準をとおして自然風景を鑑賞する態度」があり, ピクチャレスク・ツーリズムとは, 「絵画から引き出された自然美の理想を, 実際の自然の中に発見しようとする旅行」であり, したがって, ピクチャレスク・ツーリズムは「絵画にかんする教養を身につけていることが不可欠」であり, 「絵画の構図を基準として風景を描写することを特徴とする」のだという⁸⁾。

その絵画とは, 17世紀にイタリアで起こった古典主義の風景画であった。それらはギリシア, ローマ時代を理想とし, その神話や宗教的題材をもとにした「場面」が風景画的に描かれたものである。ニコラ・プッサン(Nicolas Poussin 1594-1665 フランス ノルマンディ出身. ローマで活躍), クロード・ロラン(Claude Lorrain 1600?-1682 フランス ロレーヌ出身. ローマで活躍), サルヴァトーレ・ローザ(Salvator Rosa 1615-1673 イタリア ナポリ出身)らの絵画は, とくに理想的風景画としてもてはやされ, イギリス富裕層はイタリアグランドツアーの土産にこぞって買い求めた⁹⁾。

18世紀のイギリスは, ストウ庭園をひとつの成果として, イギリス風景式庭園が独特の庭園様式として定着していた頃である。ところが, R. ナイト, ユヴデイル・プライス(Uvedale Price 1747-1829)をはじめとするピクチャレスク信奉者は, イギリス風景式庭園を批判の標的とした。そのあらましについては, Appleton 自身がかんりの紙数を割いているので, ここでは繰り返さない。ただ, Appleton によれば, ピクチャレスク信奉者に「最も嫌われたのは, ……単調で興奮を欠いた造園スタイル」で, 求められたのは「肌理の荒さ, 不規則性, 不均整, 部分的な隠蔽, 思いがけないもの, とりわけ人工的な手法より自然に起こるという印象」であり, 「突然の変化と多様性」だという(pp. 48-49)。

いっぽう, 注目すべきは, 風景式庭園の作家として名声を獲得した W. ケントが, もともとは画家を目指してイタリアに留学し, さまざまな経緯を経て帰国後造園家に転身し, 絵によって庭園の完成イメージを提示する手法を用いて人気を博したこと。さらに, その絵は, 当時, 地主階級がグランドツアーで目にしたプッサン, ロラン, ローザらの理想的風景画の影響を多分に受けていたことである。

図-2 は W. ケントによるスケッチである。「ハンプトン・コート, エシャーおよびテムズ川のある風景奇想曲」と題するこの絵の右半分には, 理想的風景画(例えば, 図-3)と類似した構図を見出すことができる。



図-2 W. ケントによるスケッチ. 原題: “landscape capriccio with Hampton Court, Esher and the River Thames”¹⁰⁾



図-3 クロード・ロラン『アポロと詩神のいる風景』(The Experience of Landscape 1997版よりfig.4を転載)

風景式庭園は理想的風景画の延長上にあるのだから、ピクチャレスク信奉者に批判される理由はないように思われる。しかしながら信奉者はイギリス風景式庭園を糾弾した。なるほど、Appleton が「第8章 流行, 趣味, イデオム」の「景観設計の対照的スタイル」に引用した図 38 および 39 (p. 289) – 先の R. ペイン・ナイトが『風景』と題する教訓詩を発表するにあたって、挿画として画家にしたためさせたものという – をみれば、少なくともブラウンの作風が、洗練に向かってひっきりなしの少ない滑らかな庭園景観を呈するものになっていることがわかる。この図は、造園学界では有名でたびたび引用されているようだが、同じフィールドなら、風景式とピクチャレスクはこのように異なった庭園を生み出すという比較図(もちろん、ピクチャレスクのほうが優位だとナイトが主張するためにつくられた)である。

Appleton は、「第2章」で、英国の庭園のあり方をめぐる美学者達の「つまらない議論の瑣末さに苛立ちは覚える」(pp. 52-53)としながらも、風景式庭園とピクチャレスク信奉者の優劣にかんする議論は棚上げし、「風景と私たちが目標とする美学との間を埋めようとするならば、あらためて参照すべき多くの観念が見出される」(p. 53)と続けている。つまり、自らの提起する「理論」なら両者をどのように説明し分けることになるかと、読者の注

意を促しているのである。

その答えは、ふたたび「第8章 流行, 趣味, イデオム」の「景観設計の対照的スタイル」に示される。結論から言えば、ル・ノートルに比べれば、風景式庭園もピクチャレスクもともに眺望・隠れ場という観点からみてより複雑で、多くの含蓄があるという主張をしているに等しい。先の、「要するにブラウンは、ヴィスタにすべての希望をかけたル・ノートルより、眺望のイメージアリーをさらに大きく広げようとした」という皮肉は、まさにここで述べられている。この皮肉を経て、ピクチャレスク派が攻撃する L. ブラウンの庭ですら、ル・ノートルが心血を注いだ眺望より価値があるということを、「眺望-隠れ場」理論なら説明可能であることを Appleton は示唆しているのである。

(4) Appleton の意図

このようにみえてくると、イギリス風景式庭園のフランス整形形式庭園に対する優位性を、従来の批評家よりも「理論」的に説明したいし、それが可能であることを示す意図が、Appleton にはあったと考えることができる。

「第1章 論点の所在」の冒頭で、「そもそも私たちは、風景のどのような点を好むのか、またその理由は何か。本書はこれらの疑問に答えを出すためのものというより、その意味するところを多少なりとも明らかにするもの」(p. 1)と切り出した以上、個人的な好みを別にすれば、庭園として特徴的な2つの様式がそれぞれ相応の文化的価値をもち、相応の風景論的位置を占めることを最初に認めなければならないはずである。しかし、そこから出発すると、見られずに相手を見るというような動物行動学的発想はどうしても引き出されようがない。

イギリス人による整形形式庭園批判の長い歴史も相俟って、フランス整形形式庭園よりもイギリス風景式庭園に軍配があがるように、彼の「理論」は着想づけられ、構成されていったと考えるほかない。オギュスタン・ベルク氏がこの「理論」に同調できなかった本音は、この点にあるものと推測される。

4. 「眺望-隠れ場」理論における “to see without being seen” のゆくえ

(1) prospect and refuge における “and” の拘束性

Appleton はローレンツの一節を引いて、「姿を見せずに相手を見るという欲望」(to see without being seen)を「すべての生物学的欲求を満たす欲望の一助」としてとらえ、独自の美学的仮説を「眺望-隠れ場理論」(p. 98 / p. 66)と名付けている(「第3章 行動と環境」「眺望-隠れ

場理論)。つまり、眺望と隠れ場とは、この「理論」では、本来的には同時に満足される状況を想定していることが明記されている。

Appleton は「眺望か隠れ場が弱ければ、他方の強さがそれを補う」といい、「二項対立」や「二元論」を「眺望」と「隠れ場」で構成しようというのではない (p. 99/pp. 66-67) とする。原書においては接続語として and と or を使い分けながらも、少なくとも「第三章」までは、prospect と refuge とはセットで記述されている。

しかし、この姿勢は、象徴性との関係を考察する段階ではほとんど保たれていない。「第4章」最初の節「風景の象徴的解釈」の末尾には、「眺望-隠れ場の術語で風景分析を行なうための象徴性の枠組みを設定するときとの書き出しに続けて次のような記述があって、prospect と refuge とは別個に扱われている。

「私たちは・・・見ることと見られないことそれぞれに通じる特徴、対象、状況が認識されなければならない」 (p. 114, 傍点引用者=筆者)

この箇所を原書に戻っても、prospect と refuge とを個別に扱う姿勢は同様に確認できる。

“We need to be able to identify those features, objects or situations which are conducive to seeing and those which are conducive to not being seen.” (p. 76, 下線引用者=筆者)

ちなみに、この箇所を原文に沿って和訳すれば次のようになる。

私たちは、見ることに繋がるような特徴、対象または状況と、見られないことに繋がるようなそれらとを見極めることができるようであればならない。

これに続く記述、「観察を直接利用したり、間接的に視野を広げたりする機会を暗示する特徴、対象、状況であれば眺望の範疇に、また隠れたり逃れたりする機会を実際に提供し、象徴的に暗示するものは隠れ場の範疇に適合する」 (p. 114, 傍点引用者=筆者) にしても、「第4章」の節の構成(「眺望のイメージと象徴性 the imagery and symbolism of the prospect」と「隠れ場のイメージと象徴性 the imagery and symbolism of the refuge」とが分割されている)をみても、prospect と refuge とを個別に検討しても支障なしと Appleton がみなしていることが読み取れる(次いでながら、「第4章」で、新たに「危険」(hazard)概念が盛り込まれることになるが、この点については小稿では言及しないことにする)。

つまり、『風景の経験』の「第4章」で論じられているのは、眺望と隠れ場が同時に成立しているような景観の像と象徴性ではない。“prospect and refuge”における“and”の拘束性は、少なくとも「理論」の検討段階でかなり弱められているのである。

(2) prospect and refuge の記述様態

自らの「理論」に対する如上の要素還元主義的な態度は、方便としてあるのか、それとも、Appleton の思惑から「姿を見せずに相手を見るという欲望」(to see without being seen)の視点が基本的に後退していったのか。この問題を考察するために、「理論」の有効性を芸術作品一般の中で総合的に提示しようとした—したがって、そこでこそ prospect と refuge とが“to see without being seen”という文脈の上にセットで論じられてしかるべき—「第7章」における、“prospect and refuge”の記述様態を分析する。

だが、その前に、「第4章」に登場する「図9 教訓的風景」を検討しておく。「図9」は、「眺望-隠れ場理論」における象徴性について Appleton が検討した「第4章 象徴性の枠組み」で最初に登場する概念図である(図-4)。その掲載節は「眺望のイメージと象徴性」でありながら、キャプションに「隠れ場のイメージと象徴性」に関わる要素も盛り込まれている。また、「眺望のイメージと象徴性」に、「図9」を名指しして直接解説する文言はない。このことから、この図は「眺望のイメージと象徴性」の解説のためだけに用意されたのではなく、少なくとも両方にかんする論述に耐えるように用意されたものと考えられる。

a) 「教訓的風景」にまつわる記述様態

図-4 —『風景の経験』で「図9」—の絵画は Appleton の自作らしいが、画中にアルファベットによる略号が書き入れられ、それら略号の意味はキャプション中に示されている。これを、表-1に整理した。同表の意図は、「眺望のイメージと象徴性」、「隠れ場のイメージと象徴性」など『風景の経験』の本文を追いつながら、“prospect and refuge”にかんする Appleton の記述様態を検討することにある。

ここでいう記述様態とは、prospect と refuge とがセットで不可分のものとして扱われているか、個別に扱われているか、その記述のありようを指す。表-1 各欄の解説は以下の通りである。

i) 「本文から推測される意味など」欄：「図9」を名指ししての解説は本文中にないため、略号と名称について、本文から拾いだされた意味を記載

ii) 「本文中の主要な解説登場箇所」欄：対応する本文中の該当箇所を記載

iii) The Imagery and Symbolism of 欄：「第4章」の「眺望のイメージと象徴性」という節に prospect のそれとして略号に関連する記述がなされていれば、当該略号の prospect 欄に○印を付した。同様に、「隠れ場のイメージと象徴性」という節に refuge のそれとして略号に関連する記述がなされていれば、当該略号の

refuge 欄に○印を付した。

iv) Symbolism を強調するファクター欄：「第4章」には「○○のイメージリーと象徴性」という節以外に、「表面」（「術語はすべて、同じように水平線にも十分利用できる」と注釈がある）、「光と闇」、「象徴性のレベル」など、眺望、隠れ場のそれぞれをそれなりのかたちで強調するという付帯的な概念が提起されている。それら付帯的概念との関連で当該の略号の意味(眺望、隠れ場のいずれを強調しているのか)を読み取り、The Imagery and Symbolism of の該当欄に*印、Symbolism を強調するファクターの該当欄に記号レを書き入れて対応させた。

なお、Magnet は、「第5章」の「磁場」という節で登場する概念で、眺望、隠れ場のそれぞれをそれなりのかたちで強調する役割を与えられている(これが、「第4章」



図4 Appletonによる「教訓的風景 Didactic Landscape」(The Experience of Landscape 1997版より fig. 9を転載)

表-1「教訓的風景 Didactic Landscape」にみる prospect と refuge の記述様態

	図9中の記号		本文から推測される意味など(「」は本文からの引用)	本文の主要な解説登場箇所		The Imagery and Symbolism of			Symbolismを強調するファクター			
	記号	キャプション中の解説		章	頁 訳書/原書	prospect	hazard	refuge	Surfaces (&Horizon)	Magnet	Light and darkness	Levels of Symbolism
画面 左側	V	Vista	明瞭な「境界線で制限」された「視野」	4	116/77	○						
	O	Offset	「陽光」の差し込みによって別方向への視野の展開可能性を暗示	4	122/82	○						
	MF	Maximum Fetch	視野の広がり最大の方向	4	119/80	○						
	MA	Magnetic Area	風景画で「目が」「引き付けられる」領域	5	185/127-	*				レ		
	CS	Carpeted Surface	?(NSの記述がこれにも適用?)	-	-	*?			レ			
	NS	Naked Surface	「滑らかで裂け目や他の不規則さを免れているときに眺望を導く」	4	141/97	*			レ			
	Arch S	Architectural Surface	人工的に与えられた「肌理」	4	142/97			?	レ			
	RA	-	-	-	-							
画面 右側	V	Vista	既出			○						
	DV	Deflected Vista	「視野」の屈折によって持続的に形成されるヴィスタ	4	122-/82-	○						
	O	Offset	既出			○						
	SVPs	Secondary Vantage-point(s)	「移動すれば視野も広がる」との信念「にもとづく」「潜在的視点」	4	119/80	○						
	S-D	Sky Dado	「水平線と雲の暗い覆いの間にある明るく澄んだ空の層」。「空の薄色部分を水平線と対置して眺望の象徴性を強調し、目をその方向に向けさせる」 dado は建築用語、円柱台座部で上礎と下礎に挟まれた部分	4	152/104	*						レ
	ML	Magnetic Line	風景画で「目が」「引き付けられる」線(=「水平線」)	5	185/128	*				レ		
	Aq S	Aquatic Surface	「遮られない視界の可能性を高く保証する」	4	142/	*			レ			
	C	Coulisse	舞台袖の袖道具がつくる空所	4	138/80			○				
	Arb R	Arboreal Refuge	「ある程度」の「眺望を得ることはできる」中を「抜ける移動が容易で逃げやすい」(vegitationoal refuge, p.93)	4	136/93			○				
	Arb S	Arboreal Surface	「全体に隠れ場の象徴性をいっそう強く暗示」	4	142/97			*	レ			
	CC	Cloud Canopy	「黒い雲の天蓋の下に寝つことは・・・低い洞窟・・・にいる経験に似ている」	4	152/104			*				レ
	P+R	Prospect+Refuge Symbol	(「自分の姿を見せずに相手を見る」の象徴性)	(3)	(98/66)	○		○				
	Arb H	Arboreal Horizon	高緯度地方に住み「樹木の茂る山」に見慣れない人は、それに「極端な眺望の象徴性」を見出せない	4	143/98			?	レ			
RRS	-	-	-	-			?					

の図中に略号で平然と記載されている)。これも同様に、Symbolism を強調するファクター欄に整理した。

表-1 によって、少なくとも「第4章」では、prospect と refuge とは個別的に扱われ、この2つをセットとして位置づける考え方を明確にしていないことがわかる。例外として、「図9」の右下に四阿風の建物が描かれ、そこにただ一つ「P + R」の略号がある。同図のキャプションには「眺望 + 隠れ場の象徴(Prospect + Refuge Symbol)」(p. 117/p. 78)との記載がある。しかし、本文でこのことへの注意を促す記述は見つからない。prospect と refuge とをセットで考慮することをAppletonは一顧だにしないというわけではな

いようだが、少なくとも「第4章」では積極的ではないことが示唆される。

b) 『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』の「分析図」にみる記述様態

Appleton は「第7章 諸芸術の風景」で、「理論」の有効性を芸術作品一般の中で総合的に提示しようと試みている。その中で、もっとも分析的な節 — 少なくとも「分析図」のようなものを提示している節 — は、第3節「絵画の眺望と隠れ場」である。ここで引用された絵画は、英国風景式庭園にもピクチャレスク・ツーリズムにも影響を与えた画家による理想的風景画である。



図-5 S. ローザ『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』
(*The Experience of Landscape* 1997 版 より fig. 32 を転載)

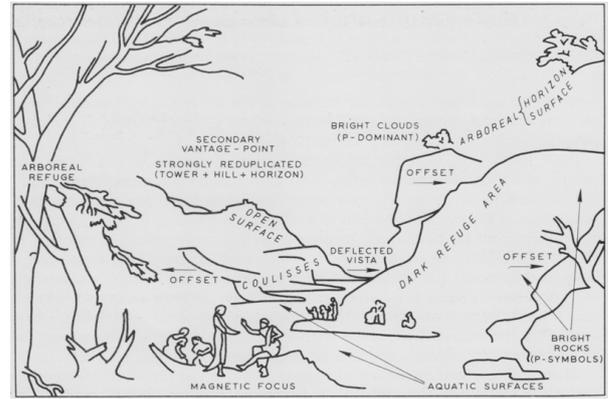


図-6 Appleton による『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』の分析図(*The Experience of Landscape* 1997 版 より fig. 33 B を転載)

表-2 『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』の「分析図」にみる prospect と refuge の記述様態

図32に対応させた図33中の用語		The Imagery and Symbolism of			Symbolismを強調するファクター			
象徴性にかかわる用語	補足もしくは補足と思われる記述	prospect	hazard	refuge	Surfaces (&Horizon)	Magnet	Light and darkness	Levels of Symbolism
DEFLECTED VISTA		○						
OFFSET	BRIGHT ROCKS (P-SYMBOLS)	○						
SECONDARY VANTAGE-POINT	STRONGLY REDUPRICATED (TOWER+HILL+HORIZON)	○						
OPEN SURFACE		*			レ			
BRIGHT CLOUDS	(P-DOMINANT)	*					レ	
AQUATIC SURFACE		*			レ			
ARBOREAL REFUGE				○				
COULISSES				○				
ARBOREAL HORIZON				*	レ			
ARBOREAL SURFACE				*	レ			
DARK REFUGE AREA				*			レ	
MAGNETIC FOCUS				?				

まず、このうち、「図 32」— S. ローザの『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』(図-5)と、Appleton がその「分析図 Analytical Diagrams」と称する「図 33 A, B」のうち、「理論」のために考案された「B」(図-6)について、本文の記述様態をみることにする。

Appleton は「図 32」(図-5)をもとに「図 33 B」(図-6)を描き起こし、本文で、S. ローザの絵画に prospect と refuge の象徴がどのように見出されるかを解説している。小稿では、「図 33 B」(図-6)中の用語を表-2 の「象徴性にかかわる用語」欄と「補足もしくは補足と思われる記述」欄に記入し、次に本文と照合させて、「The Imagery and Symbolism of」欄、「Symbolism を強調するファクター」欄を表-1 と同様の手続きによって埋めた。

ここで明らかになったことは、Appleton は、prospect と refuge をセットで捉えるという姿勢をほとんど放棄しているように見えるということである。

c) 『海港』にみる記述様態

次に、同節の「図34」— クロード・ロラン『海港』— の分析にみる記述様態をみる。S. ローザ以上にイギリス人の人気を獲得した理想的風景画家ロランについて、Appleton は『海港』(図-7)を選択し、分析の俎上にあげている。ただし、Appleton は『海港』については、『アポロとクマエのシビルがいる河の風景』のような「分析

図」を用意せず、本文で詳しく解説するという方法をとっている。

表-3 左欄に、『風景の経験』の本文記述 (p. 268 / p. 184) を「象徴性にかかわる用語」と「本文の解説、画中で対応する要素など」に分類整理して記入し、同表右欄は表-1, 2 と同様の構成とした。

ここに、“prospect and refuge are closely intermixed” という、prospect と refuge のセットを名指しする言い回しがはじめて見つかる。Appleton がこの言い回しを適用しているのは「図34」(図-7)の左側に並ぶ建物群である。訳者はこれを、「高い建物が作る水平線(左側)によって、眺望と隠れ場が緊密に混ざり合う対照的形式が数多く導かれる」としているが、まことに意味がわかりにくい。

原書に戻ると、“The high architectural horizons (left) introduce a number of contrasting forms in which prospect and refuge are closely intermixed.”であり、これと「図34」を照合すれば、次頁のように訳するのが妥当だと思われる。また、Appleton もここはさすがに horizons ではなく、skylines とすべきではなからうか。

高い建築の(数々の)スカイライン(画面左手)は、たくさんの対照的 (に特異な建築の)形につながっているが、その中には眺望と隠れ場とが緊密に入り混じっている



図-7 クロード・ロラン『海港』(The Experience of Landscape 1997版より fig. 34を転載)

Appleton の解説は、直近 (the nearest building) と奥の建物 (the second building) に応じて 2 つに分けて行なわれている。その内容を吟味すると、奥の建物については、塔がその特徴のうちに prospect と refuge の象徴を同時に有すると指摘しているように思われる。

訳書では、「もう一つの建物では塔のオープンアーチが、空を背景にシルエットとなる手すりとともに強力な眺望象徴となるものへの通路、したがって隠れ場を導く」とあって趣旨がほとんど理解できない。原書に戻ると、
 “In the second building the open arches of the towers invite access, and therefore refuge, in what are still strong prospect symbols with their balustrades silhouetted against the sky”
 とある。これを意識すれば次のようになるろう。

表-3 『海港』の分析にみる prospect と refuge の記述様態

図34に対応させた本文の記述		本文の主要な解説登場箇所 (p. 268/184 行: 訳書/原書)	The Imagery and Symbolism of			Symbolismを強調するファクター			
象徴性にかかわる用語	本文の解説, 画中で対応する要素など		prospect	hazard	refuge	Surfaces (&Horizon)	Magnet	Light and darkness	Levels of Symbolism
Vista	「低い太陽と線のように延びる照り返しにヴィスタの軸が強調」	2-3/1-2	○						
the long fetch			○						
the brightness of the lower sky	「これらすべてによって」鑑賞者の「視線は同じ方向に向かう」	3-4/2-4	*					レ	
the aquatic horizon			*			レ			
the refuge symbols	「樹葉の小さな一画(最左端)」	11-12/16-18			○				
	「さまざまな小舟」				○				
	「前景」の「暗い色調」				*			レ	
the coulisses	「建物と船によって構成」	15-16/23-25			○				
prospect and refuge are closely intermixed	「画中左側の」 「高い建物」		○		○				
(the nearest building)									
the prospect value	「ベディメントの水平線で最高」	4-8/4-10	○						
the penetrability(浸透性)	「階段」, 「ポルチコ」, 「バルコニー」				○				
(the second building)									
strong prospect symbols	「空を背景にシルエットをつくる高欄」付きの塔		○						
refuge	「立ち入り誘う」 「オープンアーチ」をもつ「塔」				○				
a composite imagery	「船」		○		○				
prospect dominant	「橋上見張り台」, マスト頂部の「旗」	8-10/12-15	○						
refuge element	「船体」				○				
not free from the symbolism of hazard, raining	「暗い雲」, 降雨の指摘があるにしても「たいへん弱い雨」	12-15/18-23		*					

二番目の(すなわち、奥の)建物では(複数の)塔のオープンアーチがそこへの立ち入りを誘う。それゆえ(これらの塔は)refuge(の象徴性を有するが、その象徴性は、塔が)空を背にシルエットをなしている高欄を伴い、なお強力な眺望の象徴性たることのうちにある。

この意識が正しければ、「眺望と隠れ場が緊密に混ざり合う」は、prospectとrefugeのセットを指すだけでなく、「to see without being seen」を受けて、prospectが可能であると同時にそこがrefugeでもあるという状況を指していることになる(表-3 網掛部)。

しかし、同じく「眺望と隠れ場が緊密に混ざり合う」とみなしているはずの「直近の」建物では、その建物の構成要素がprospectとrefugeの象徴性を個別的に備えていることを指摘するに留まっている。

また、画中の船については「複合的なイメージリー a

composite imagery」があるとして、「船体に象徴される隠れ場の要素は、目がマストに沿って「橋上見張り台」や最上部の旗へ移動するにつれ、眺望優勢となる」と解説する。つまり、船(の絵)が、眺望を象徴する要素と隠れ場を象徴する要素の混成物だとみなしている。“prospect and refuge”について、prospectが可能でかつその場所が同時にrefugeでもある状況を想定しているわけではないことを、Appletonは、“a composite imagery”という言い方によって、ある意味で明確に述べたということになる。

d) “to see without being seen” のゆくえ

以上の検討を踏まえると、“to see without being seen”を受けて、prospectが可能であると同時にそこがrefugeでもあるという状況が“prospect and refuge”の本質であるという姿勢を、Appletonは必ずしも一貫させていないことができる。分析の便宜として要素還元的

な立場に立つためというわけではなく、Appleton自身の中で、“to see without being seen”と“prospect and refuge”との対応関係が厳密には整理されていないという事情を示しているものと思われる。

5. 絵画表象に対する Appleton の立ち位置

(1) 理想的風景画の場合

“to see without being seen”という原点に帰れば、理想的風景画の画面が、しばしば、それを鑑賞する者に、それこそ prospect と refuge を同時に経験させるかのように構成されている、つまり、あたかも鑑賞者自身を取り囲むかのように、前景に立木あるいは建物等を置き、画面奥、遠方に眺望を開くという、理想的風景画のほとんど定型的といっている構図(図-3.5, 7)それ自体を、Appleton がどのように捉えているかが重要になる。

『風景の経験』にこれに関連する箇所を探すと、たとえば先の「図-32」(S. ローザの風景画)について次のような記述が見つかる。

(美術分野の批評家が採用するような)いわば2次元的な構図の分析は、「風景を生物が生存するために有利な舞台として理解する」ための「3次元の関係(図3 B)から注意を逸ら」すとし (p. 265)、自らの着眼が2次元的構図論とは異なることを明言する。

もちろん、批評家はつねに3次元的分析を怠るわけではないと Appleton は注意深くフォローしながら、クロードの絵にかんするある批評家の言説から次のような「術語」を拾い出す。「風景のなかを歩き、その距離を測る」、「ここに存在する世界は、想像力が入り込んで、さまざまよえるように意図」されたもので、「これを達成しているのは、一方に樹木を置き、他方それに呼応」して「舞台のように開けた前景」があり、「曲がりくねった道」である。

その上で、「この種の術語には明らかに、観察者に実際の三次元空間の関係を体験することを期待させる「見方が含まれている」が、「観察者の・・・役割を一般的に認識することと、眺望-隠れ場の術語で絵画を記述できる批評分析のシステムを案出することは別」(以上、pp. 264-267)だとする。

それがどのように違うかという点について、自分ならクロードの、たとえば『海港画』(図-7)を異なる術語で記述してみせるとして、「ほとんどのクロードの海港画のように、眺望は本質的にヴィスタを構成する」(p. 268)と解説を始める。これに続く部分が「前掲の記述様態」(小稿第4章(2)節c)項)である。そこには、画面に想定される鑑賞者の立ち位置それ自体ではなく、鑑賞者から離

れていると目される画中の地点のいくつかが、prospect もしくは refuge の象徴性を帯びているかどうか吟味されている。「風景画の構図は、眺望象徴と隠れ場象徴の配置を具体的に決める一般規則によって・・・条件づけられている」(p. 166, 傍点引用者=筆者)という記述にも、如上の姿勢が現れている。

(2) prospect, refuge の象徴性としての絵画の構図

『風景の経験』を追跡すると、prospect の象徴として、絵画の構図と、鑑賞者の視線で経験しうるヴィスタとをだぶらせるような記述がいくつか見出される。そのもっとも明確な例は、先述したクロードの『海港図』分析の冒頭と、「ホッペマのよく知られた《ミッデルハルニスの並木道》」では、画中の構成要素「すべてが同一の消失点に収斂するが・・・この中央に描かれている道に見ている者の注意は向くはずである」(p. 160)という記述である。

室内が描かれた宗教画をとり上げて、部屋の奥に外の世界が見えような開口部がみられることに言及した箇所を除けば、いわゆる風景画の構図と refuge の象徴性を直接だぶらせたようにみられる記述は、管見では次がほぼ唯一のものである。「前景の両側に隠れ場の素材を置くことで、周囲を有利に見通せる「隠れ場所」がある程度確実になる。実際のところ観察者は、眺望の利く範囲で逆に見られているとはいえ、身を隠す場所が遠くないことに安心する。ある種の隠れ場所を前景の両側とまではないかぬにせよ、少なくとも片側に配置することは、多くの画家のように、クロードのほぼ変わらぬ習慣である。それは造園術のスタイルにも多く見られる。屋敷からの眺めは、その両側が視界を阻む草木で覆われているのが普通で・・・隠れ場の象徴性によって自分の眺望を「縁取る」」(pp. 166-167)

ただし、これは、厳密に言えば、観察者をその立ち位置のまま周囲からある程度かくまってくれるという意味で風景画の前景が refuge の象徴性を帯びている、という指摘ではない。観察者の立ち位置はそのままでは周囲からの目に晒されているが、画中の世界を少し移動するだけで、refuge の象徴性を帯びた前景に到達できるというニュアンスで語られている。続く「造園術」でも、眺望点それ自体が草木で守られ、refuge の象徴性をも帯びているというニュアンスではなく、refuge の象徴性はあくまでも眺望を「縁取る」草木それ自体にあると Appleton は位置づけている。

(3) 風景画の画中から象徴性を個別に拾いだす意義

画面の構成要素の中に prospect の象徴と refuge の象徴とを個別に拾い集めるような「立ち位置」をとることで、

Appletonが得たものは何か.それは,Appleton 独特の概念に注目することで理解されよう.

prospectの象徴性については,「間接眺望 Indirect prospects」(「第4章 象徴性の枠組み」第2節「眺望のイメージと象徴性」)の概念が特異である.この対概念としての「直接眺望 Direct prospects」を「観察者が観察地点から実際に得る視野」とし,「直接眺望」を可能にする地点を「一次的視点 Primary vantage-points」と呼んでいる.いっぽう,「見ることによる満足は,自分の生息地に有利な場所を得ることによる満足の一部でしかなく,観察地点を移動すれば視野も広がるとの信念によって,環境を有利に使っているという感覚がさらに強まる」とする.そして,「そのような代わりをする観察地点」—これはおそらく,あそこに行けば広い視野が得られるだろうと想像させる地点のことかと思われる—を「二次的視点 Secondary vantage-points」,「そこから得られると推測できる潜在的視野を間接眺望と名づけ」ている(p. 119/p. 80).

refugeの象徴性について,類似概念は提出されていない.ただし,観察者がその立ち位置から離れた箇所にrefugeの象徴性を見出すということについて,「近づきやすさ accessibility」(p. 137/p. 94)という概念が用意されていることは注目に値する.「隠れ場によって保護が得られることから・・・そこへの近づきやすさが重要な要素となる」とし,建物に「ポルチコを飾ったり階段をつけたりすれば,手に負えない障害物ではなく魅力的な隠れ場となり,建物の「窓,アルコーブ,凹所,バルコニー・・・など,これらすべては容易に隠れ場所へ近づけることを暗示する」とか,「実際には近づけなくても,近づけるとわかる(the suggestion of accessibility)だけで隠れ場の概念は刺激される」(同上)という言い方には,隠れ場所が観察者に対して入口を開けて待つかのように見えることを重視するAppletonの姿勢が現れている.

たしかに,prospect や refugeについて仮想行動やアフオーダンスとも繋がるような概念に到達し得たのは,観察者自身がrefugeの象徴に包まれてなお prospectを獲得しているというような身体論的モデルに安住しなかったからだとも言える.この立ち位置が「理論」に広がりを与えたとみることにはできよう.だが,これらの概念の導出手続きはきわめて恣意的であって,ひとえにAppleton自身の風景画の「読み」にかかっているに過ぎない.

それにもかかわらず,これらの概念をもとに,“to see without being seen”の基本に戻って「理論」を再検討する必要はあるように思われる.あそこに行けば prospect と refugeとが同時に得られそうだという観点から環境を眺める,そのような見方がもつ可能性をAppletonが検討していないのは,ある意味でこの「理論」を何にでも

都合よく適用可能な,一見万能の,しかしそれだけに浅薄なものにしたことは否めない.prospect と refugeの個別の象徴なら,ほとんどいかなる環境にも見出しうるという意味において「理論」の厳密性に疑念が持たれると同時に,その限界すら定めることができず,「理論」の起源であったはずの“to see without being seen”からほとんど離脱しているという意味において,「理論」の論理性に疑念が持たれるのである.

6. おわりに

以上の考察の結果をまとめると以下ようになる.

- i. Appleton の「眺望-隠れ場理論」は,イギリス風景式庭園のフランス整形式庭園に対する優位性を説明するという意図を帯びて着想づけられ,構成されていた可能性が高い.オギュスタン・ベルク氏はおそらくその点を見抜いて,この「理論」を冷ややかに眺めたものと思われる.
- ii. Appleton は,その「理論」的根拠を“to see without being seen”に置きながら,枠組みの展開においてはそこから離脱することに無頓着であった.そのことによって,prospect と refuge にまつわる仮想行動的,あるいはアフオーダンス的論点を獲得したいっぽう,「理論」の無際限な適用可能性,論理的不整合については放置するに至っている.

なお,以上は傍証とすべき資料の入手や検討が不十分なままの試論に過ぎないことをお断りしておきたい.また,図-2と図-4の構成の類似性など検討すべき点は多く残されているが,都市空間への適用問題の検討とともに,今後の課題としたい.

引用文献

- 1) 樋口忠彦:日本の景観,p.191,春秋社,1981
- 2) 小田部胤久:自然的なものとな人為的なものの交わるころ,美学藝術学研究 16, pp.81-122, 1997
- 3) 前掲 2)
- 4) 加藤光也:詩人と庭園 - ポープの場合 -,一橋論叢,Vol. 85, No. 6 pp.60-78, 1981
- 5) 岩井茂昭:イギリス風形式庭園と「ピクチャレスク」の概念,近畿大学教養・外国語センター紀要, 3(2) pp.33-47, 2013
- 6) 前掲 5)
- 7) 大河内 昌:ピクチャレスクと「リアル」,山形大学人文学部-研究報告書, pp.21-38, 2008. なお,この種の指摘はすでにケネス・クラークが行なっている.
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲7)
- 10) John Dixon Hunt: *Gardens and Picturesque, Studies in the history of Landscape Architecture*, fig. 1. 19, MIT, 1992